

天地

ネットワーク テーブル 473号

発行：天地シニアネットワーク：2018年6月15

2*****

TENTĪ TODAY			1
会員の広場	<手賀沼の写真><動画コーナー> <日大アメフト事件、審判の報道>		2
連載作品			3
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 48. コイル (ソレノイド) について	伊那 闊歩	3
随 筆	「1950年代の僕と街」(10) あずき色の国電とボンネットバス	臺 一郎	6
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語 (46) 周山街道の古刹2・梅尾の夏, 高山寺	大竹 漢洲	8
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		10
事務局			11

TENTĪ TODAY

米朝首脳会談、新しい世界の潮流を感じさせる会談でした。過去のしがらみに捉われない、未来志向の発想、そういう時代が来たようです。過去の経験でしかものを考えられない世代には、危なっかしく見えるのですが、それでは進歩がありません。両首脳に期待します。

1964年の東京オリンピック時のバスケットボール関係の選手、役員、関係者の集まりが数年前まであり、高齢化のために2年ほど前に終了となりました。今回は、競技役員が集まらず、企業、大学へ協力を要請して要員を集めましたが、今度のオリンピックは、規模が一段と大きくなり、会場も都心を離れる様子なので要員確保に苦労しそうです。準備がおこなわれているような気がするのですが・・・

お茶の水にあるN大病院の皮膚科に数年前から通い、だいたい1年に1回の割合で薬をもらいに行きます。最近、予約を申し込むと、地元病院の紹介状を持ってきて下さいとのこと。専門にかかっていたのだから、紹介状などと言われても困るという、新規申し込みを指示されました。ただし予約は3か月先と聞き、思わず愕然。医者が減っているとも言っていましたが、納得いかず、腹をたてています。

会員の広場



手賀沼で、最近最も感動したワンショットです。ご覧ください。

2018.6.4 北川新十郎

動画コーナー

皮肉にも梅雨入り宣言が出た翌日は快晴で夏日！そんな気候でしたが学生時代の仲間と「迎賓館」を見学に。6月4日家を予定より1時間半早く出て寄り道をしました。

「井の頭恩賜公園」 木陰が素敵な散歩道を歩き、快適なウォーキングでした。その後、四ツ谷駅から「国宝の迎賓館」正門前の集合場所へ。本館内は撮影禁止ですので、ホームページから使用しました。

「初夏の井の頭恩賜公園」

https://youtu.be/Ho9_aBGVuu0

「国宝・赤坂離宮迎賓館」

https://youtu.be/Te_316Uzi6Y

yaku5151 (小泉)

<日大アメフット事件、審判の報道>

日大アメフットのラフプレー、前号(472号)で審判の声も聞きたいとコメントのせましたが、数日後の朝日新聞に審判への取材記事がでていました。主審は、「即退場も考えたが、<何をしているんだ・・・>と、加害選手に声をかけた」「即退場も考えたが、しなかった。判断は間違っていなかった」というようなコメントを残していました。審判歴25年というベテランであれば、余計にあのような明らかに故意で危険なプレーを見て「即退場」とし

なかったのか、不審でなりません。異常と判断しない感性、物足りなさを非常に感じます。また問題の本質に関心を持たない報道にも、落胆を禁じえませんでした。

スポーツに危険はつきものですが、大前提として、「相手に危害を与えるような故意なる危険なプレーはしない」という暗黙の了解があるはずで、まして学生スポーツには、教育的な側面があり、「スポーツを通じての人格形成が、世界の平和に通じる」とかつて早稲田大学のラグビー部を率いた故大西鉄之助監督は言われたそうですが、基本的な心構えを、指導者は改めて再確認すべきです。

もし今回、最初のラフプレーで「即退場」とし、両チームの主将を呼んで注意をする、で治めていたとすれば、違った展開になったでしょう。

日大バッシングだけで終わっては、今回の事件からの教訓は何も生まれません。(津田)

連載作品

天のわざ、地のほまれ

—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

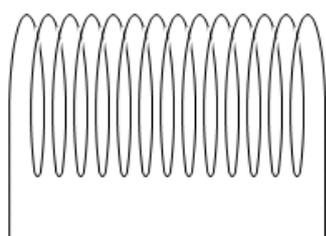
48. コイル (ソレノイド) について

電磁石を発明したのは英国人電気技師ウィリアム・スタージェン(1783-1850)

であるという。1825年、かれは馬蹄形の鉄の芯に銅線を数回まきつけて電気の導線とし、その導線に電流を流し、鉄芯が磁化されることを発見したのだ。同じ頃、かけ出しの米国人物理学者ジョセフ・ヘンリー(1797-1878)は、鉄芯に絹布で被覆した銅線を400回まきつけて電磁石とし、300kg以上の鉄材を持ち上げることに成功したという。かれはさらに改良して1トンほどのものを電磁石でもちあげたそうである。

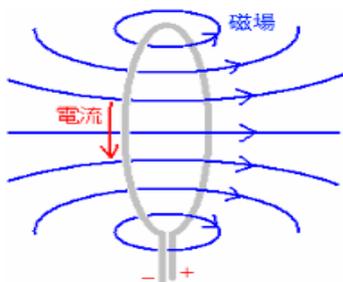
fig.1 は銅線を筒状に巻いたものである。これに電池をつないで通電すれば(電)磁石になる。芯に(軟)鉄をいれれば磁力が強化される。銅線をぐるぐる巻いたものを一般にコイルという。とくに導線を整然と筒状に巻いたものをソレノイド(ソレノイド・コイル)といい、電気回路で頻繁に使用される重要な受動素子である(*1)。

fig.1 ソレノイド



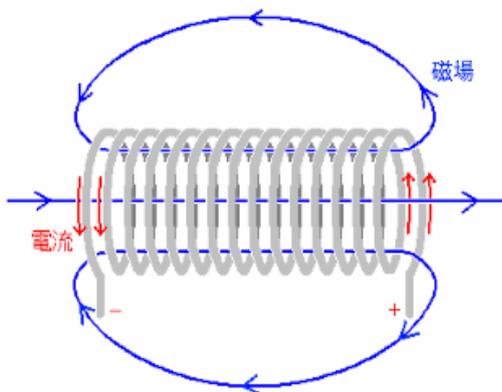
これに電池から電流(直流)を流せば、ソレノイドの空洞部分をとる磁場が生じ、電磁石になる。ソレノイドの長さを l (メートル)、巻き数を N (回)とすれば、単位長さあたりの巻き数 n は $n = N / l$ であるが、とくに巻き数が1回のを fig.2 にしめす。電流の強さを I (アンペア)としてこの電流のループの半径を r とすれば、ループの中心での磁場の強さ H は $H = I/2r$ [A/m] で与えられるのであった(第42回を参照)。

fig.2



この電流のループを増やして、巻き数 N のソレノイドにしたものを fig.3 に示す。電流の向きと電流が作り出す磁場の向きについては、次のようにして覚える：つまり、右手の親指を除いた4本の指の指先を電流の向きに合わせてソレノイドを包む。親指は他の4本の指と直交させるように(図では右向きに)立てる。このとき親指の指先の向きが磁場の向きに一致するのである。これをアンペールの右ねじの法則という。

fig.3 ソレノイドが作る磁場



このソレノイドに電流を流して、空間の各点での磁場の強さを知るためには、第42回で少し触れたビオ・サヴァールの法則を使ってややこしい計算をしなければならない。その計算は割愛するが、ソレノイドの長さ l が十分長い場合、結果は次のとおりである：

(1) ソレノイド内部の磁場は、内部であればどこでも $H = nI [A/m]$

(2) ソレノイド外部の磁場はゼロである： $H = 0$

ソレノイド内部の磁場は、電流が強ければ強いほど強く、銅線を密に巻けば密に巻くほど強くなる。一方磁場のループはつながっているため、外部にも残っているはずであるが、ソレノイドの長さが非常に長ければ、外部の磁場は限りなくゼロに近づくのである。

アンドレ・マリ・アンペール(1775-1836)はフランスの物理学者とくに電磁気学の創始者のひとりとされている。上記右ねじの法則のほかに電流とそれから生ずる磁場の関係についてのアンペールの法則を発見したことで有名である：

アンペールの法則：

閉じた経路にそって磁場の大きさを足し合わせた結果は、その閉じた経路を貫く電流の和に比例する(*2)。

この比例定数が1になるような電流の測り方の単位をアンペールに因んで、アンペア[A]としたのである。

アンペールの法則の応用として、ソレノイド内部の磁場を計算してみよう。

fig.4 アンペールの法則：ソレノイド内部の磁場を計算する

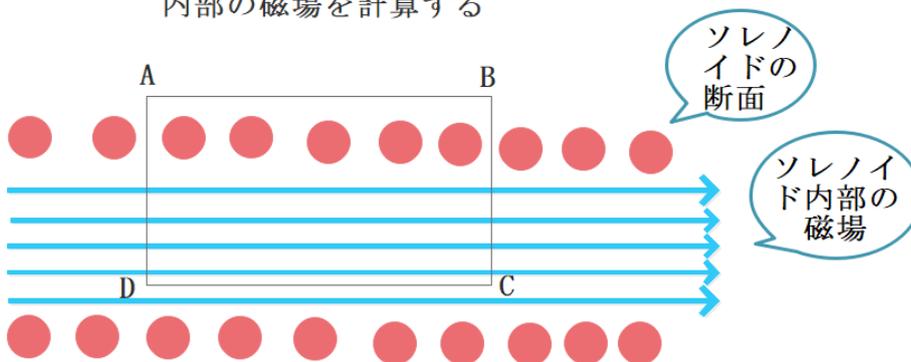


fig.4 はソレノイドを縦に切断した図である。オレンジ色の○は電流 I が流れる銅線の切断面、銅線はソレノイドの単位長さあたり n 回巻かれてある。青い矢印はソレノイド内部にできた磁力線である。内部の磁場の大きさを H とする。ソレノイドの外部 A からはじまって内部に入り A に戻る経路 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow A$ を考える。AB 上の磁場は 0 、BC および AD 上では磁場の向きと経路の向きが直交するので経路に沿う磁場 (の成分) は 0 である(*2)。経路 CD の長さを $h [m]$ とすると アンペールの法則は $H h = nI h$ と表すことができ

$$H = nI$$

を得る(上記(1))。ソレノイド内部の磁場は、内部であればどこでも $H = nI$ で与えられることが、アンペールの法則からわかるのだ。

ソレノイドは交流回路において、その真骨頂を発揮する。その詳細は次回に譲るとして、ここでは最近普及しはじめた IH クッキング・ヒーターについて調べてみよう。IH とは Induction Heating(誘導加熱)の略である。家庭に入ってくる 100 ボルト 50 ヘルツまたは 60 ヘルツの交流の周波数をインバータ制御(*3)によって高周波に変換し、それを平べったく渦状にまいたコイルに流せば、絶えず激しく変化する磁力線を発生させることができる。その磁力線を鉄板にあてるのだ。ファラデーの電磁誘導の法則(第 45 回参照)によって鉄板に起電力が生じ、激しく変化する電流のループつまり渦電流が発生して鉄板内部をかきまわす。鉄板には電気抵抗があって渦電流のエネルギーは熱エネルギーに変わる。平べったいコイルの上面に強化ガラスを設置すればクッキング・ヒーターが完成する。ガラストップによって磁力線が遮断されることはなく、鍋はこの磁力線によって効率よく熱せられる。鍋は鉄製のぞまじい。ガラストップは発熱することなく、ガスコンロなどに比べて取り扱いが容易である。

なお、渦電流は家庭の使用電気メーターから電車のブレーキまで、いろいろなところで使われている。

(*1) 最近は電子工学用語としてソレノイド・コイルのことをインダクタと呼ぶことが多い。電流のエネルギーを磁気のエネルギーに変える、または磁気から電流を誘導する素子として使われるので、インダクタ(誘導素子)と呼ばれるようになった。古い物理学辞典にこの用語はない。

なお今回掲げる図はすべて

wakariyasui.sakura.ne.jp/p/elec/ryuujiba/ryuujiba_ho.html の図を使わせていただいた。

(*2) アンペールの法則について本文の記述は不十分である。現代電磁気学の表現法によれば、

$$\oint H \cdot d\ell = I$$

と書ける。○つきの積分記号は指定された経路に沿って積分する(足し合わせる)ことを示す。

H と $d\ell$ はベクトル(つまり、大きさと向きを持つ量)であるから $H \cdot d\ell = Hd\ell \cos \theta$ と書けるので(ベクトルのスカラー積。太字はベクトル、細字はベクトルの大きさを表す)磁場の向きと経路の向きが直交していれば $H \cdot d\ell = 0$ となる。両者の向きが一致していれば、 $H \cdot d\ell = Hd\ell$ となる。無限に長い直線電流から距離 r 離れた場所での磁場の向きと経路の向きは一致するので、積分は

$$\oint H \cdot d\ell = 2\pi rH = I$$

となり

$$H = \frac{I}{2\pi r}$$

を得る。

(*3)本来は交流を直流に変換する装置（逆変換装置）をインバータというのだが、今や、高周波の交流や高電圧をつくり出す装置を広く一般にインバータと呼んでいる。たとえば、コンピュータの電源装置には、電圧と周波数を一定にたもつために、産業用モーター、エアコンのコンプレッサーなどは、その電圧や周波数を変更するために、そして蛍光灯、IH炊飯器、電磁調理器などにたいしては、交流の周波数を高周波に変えるためにそれぞれインバータ制御技術が使われている。インバータ制御技術の発展により、電磁誘導の実用範囲がますます拡がると思われる。

随筆風「1950年代の僕と街」(十)

臺 一郎

ずき色の国電とボンネットバス

昭和30年代の前半の頃、小学校の高学年から中学生時代の僕は少し鉄道少年的であった。電車や列車を見ただけで瞬時に型式がわかるほどマニアックではなかったが、とにかく好きだった。家にはOゲージの模型電車などもあって、部屋にレールを敷いてよく遊んだ。中央線であろうと、山手線であろうと、都電であろうと、週末に塾などに行く時や学校からの帰宅時にはしばしば先頭車両の一番前に乗り、ガラス越しに運転手のブレーキ操作やノッチ操作、指差し確認などを観察したものだ。

九州から東京に引っ越してきた昭和31年当時、中央線の運営は国鉄すなわち日本国有鉄道で、中央線も国電中央線と言われた。車体の色はすべてあずき色。後に中央線カラーとなったオレンジ色の車両が投入され始めたのは、昭和32年からだ。ちなみにこの時代、山手線も車体はあずき色だった。つまり国電はすべからずあずき色だったのだ。この当時のあずき色の電車のドアは、真ん中から左右に開く両開きタイプではなく、一枚ドアが片側にだけスライドして開くタイプだった。車両の左右のドアのちょうど真ん中には、アメリカのナイトクラブなどで踊り子がかまって踊る金属ポールみたいな、垂直の握り棒が床と天井に固定されていた。これが実に使い勝手の良い棒で、垂直に固定されているから身長が120センチの子供でも、150センチのお年寄りでも、170センチの成人男子でも、180センチを超える外人でも、みな同時に掴むことが出来た。電車の中には左右の吊り革のどちらにも手の届きにくい、エアーポケットならぬ吊り革ポケット的な場所があるし、背が低いとか子どもだから吊り革に手が届かない人もいる。この握り棒はそんな人達が電車の揺れや急ブレーキにより転倒するのをしばしば防いでくれた。なぜか最近の中央線や山手線には設置されていない。せめて高齢者や身障者が乗り込むことの多いシルバー&障害者シートのある車両などには、設置してもらいたいものだ。

最近のJR各社、とりわけ最大手のJR東日本は、駅構内にやたらと商業施設を設置し、結構なテナント料を取って稼ぎまくる。正直、その強欲で貪欲なまでの利益追求体質&姿勢には少し嫌悪感すら覚える。ホームドアやエスカレーターなどの設置、或いは前述のような握り棒の取り付けなど、安全や福祉のための投資や支出こそ最優先でお金を使って欲しい。

ところで少年時代の僕は、鉄道のみならずバスや船や飛行機などの乗り物全般が好きだった。特にバスは小学生の頃から毎日のように乗っていたので、強い関心を抱いていた。昭和 32 年、僕が小学 6 年生の時に、わが家は荻窪の北口側から南口側に引っ越した。卒業まで 1 年を切っていたから、転校せずに、引っ越した南口の家からバスを乗りついで北口の小学校に通った。

乗物好きの僕は、バスに乗る時も運転手のすぐ横の席に座るか、座れないときは運転手の斜め後ろに立った。運転手のハンドル捌きや、シフトレバー、アクセル、ブレーキなどの操作を見たかったからだ。

6 年生の頃に家から荻窪駅まで乗った関東バスは、一番新しいのが昭和 32 年製造、一番古いのが確か昭和 25 年頃の製造だった。どれもエンジンが客室ボディの前に飛び出したボンネットタイプのバスだ。昭和 30 年以前に製造されたバスの中には、方向指示器が腕木式で、右折のときは右側の方向指示器から赤い腕木がまるで腕を右に突き出すように飛出すのでなんかユーモラスだった。

また全てのバスには若い女性の車掌が乗っていた。乗客への切符の販売、定期券のチェック、肉声での停留所のアナウンス、運転手への通過か停車かの連絡、さらには車庫でのバック誘導などを行っていた。走行時に車内はかなり揺れた。そんな中で若い女性の車掌は巧みにバランスを取り、吊革や握り棒などに掴まりながら真面目に業務をこなしていた。コロンビアローズが『わたーしは東京のバスガール 発車オーライ 明るく明るく 走るのよ』と唄ったあのバスガールである。その後バス会社は、人件費節約のために路線バスのバスガール乗車を止めた。切符販売も定期券のチェックも停留所のアナウンスも、運転手が一人で行うワンマン運転体制へと移行したのだ。

JR もバス会社も、「コスト、コスト」と経費削減の一本やりだ。利益追求への飽くなき執念、そのための合理化や省力化の実行、コストカットへの取り組みは誠にすさまじい。昭和 30 年代から 40 年代、日本は国中が「お金を稼ぐこと」をまるで国民的課題や社会目標のように一意専心、不惜身命で取り組んだ。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（４６）

大竹漢洲

周山街道の古刹 2・梅尾の夏，高山寺

「女ひとり」 作詞 永六輔 作曲 いずみたく

京都 梅尾 高山寺 恋に疲れた女が一人
大島紬につづれ帯 影を落とした石畳
京都 梅尾 高山寺 恋に疲れた女が一人

この曲「女ひとり」がラジオやテレビから放送されました。東芝に入社して 2 年後のことです。曲に書かれている舞台、大原三千院・梅尾高山寺・嵐山大覚寺は、学生時代から度々と訪れ、何れも懐かしい思い出の多い寺院でした。余りカラオケは好きではありません。何故か「女ひとり」の曲だけは違います。全て歌詞は暗記しています。今でも 3 番まで歌える唯一の曲です。

「女ひとり」の曲には、ある女性の思い出が重なっています。

東芝を退職した後、栃木藤岡で野菜栽培を楽しみたくて、東京農大の成人学校に入学して、野菜の基礎知識や、栽培法を学びました。お陰で野菜栽培の楽しみと野菜や花卉をこよなく愛する友人を多数得ることができました。その仲間のひとりに山女・榎野君子嬢がおりました。京の女性です。ビールの好きな女性でした。拘りを待っている人で、キリン rigger の鱻ビールしか口にしない人でした。成人学校の友人たちとよく泊まり掛けで旅をしました。白馬・上高地・近くでは伊豆山です。酒が入ればカラオケです。榎野嬢もカラオケが好きではありませんが、唯一「女ひとり」の伴奏が始まると、飲んでいたビールを止めて、2番から度々デュニットした記憶があります。母子二人で独身の女性でした、介護していた母親を看取った後、突然、肝がんが見つかり呆気なく亡くなってしまいました。本人には聞くことはできませんでしたが榎尾・高山寺に特別な思い出を持っていたのかも知れません。「女ひとり」の曲を耳にする度に榎野嬢の顔と声が思い出されます。今も「女ひとり」で榎尾、嵐山、大原を旅しているのだろうか?何故か?榎尾も嵐山も大原も女ひとり旅に相応しい処です。

神護寺から更に周山街道を市営バスで北上しています。神護寺は高尾の山、懐にある寺ですが、高山寺はもっと山奥の榎尾にあります。バスの便も少なく、タクシーでは料金が嵩み、京で最も行き難い処にある寺が高山寺です。紅葉の時期を除けば、観光客の数が少なく、多くの木々に覆われた深山に点々とある古刹の堂宇を心行くまで堪能できるでしょう。

高山寺は、奈良時代、宝亀5年(774)に開祖されて当初は度賀尾坊と称され、歴史的には古く神護寺の別院となっていました。神護寺と同様に荒廃した高山寺を再建した中興の祖は、鎌倉時代になり後鳥羽上皇から帰依を受けた明恵上人でした。紀州生まれの上人は、叔父の上覚坊行慈、すなわち文覚上人について、神護寺で修行、出家しました。受戒したのは、鑑真和上が開基した東大寺の戒壇院です。

33歳になった明恵上人は、後鳥羽上皇から荒廃した度賀尾寺を与えられ、高山寺と寺名を変えて、今日まで続いています。この頃から、新しい仏教であった浄土教の台頭がめざましく、華嚴宗を護り復活させるのが、明恵上人の切なる願いでした。

華嚴宗の総本山は明恵上人が受戒を受けた東大寺です。寺号の由来も華嚴経經典の一節「日のいずるや、まず高山を照らす」に因んでいます。榎尾に入山した上人は努めて瞑想して、また瞑想したと言います。

やがて高山寺は信頼を高めて、華嚴宗復活の兆しが見え始め出した頃、なんと無謀にも後鳥羽上皇は、高山寺の隆盛な仏力を後楯にして、鎌倉幕府討伐の兵を挙げました。「承久の乱・承久3年(1221)」です。旅人も中学生で習った歴史を記憶しています。北条氏の陰謀で源氏の地脈が断たれた隙を突いた乱でした。しかし鎌倉幕府は皇族から将軍を戴き、執権北条氏に代わっても、万全な体制を維持していました。結果は公家の勢力が衰微し、武家勢力の強盛を招く戦乱でした。

北条泰時の軍勢が高山寺に乱入して、明恵上人を捉えて連行しようとしたが、逆に明恵は北条軍を説諭して、軍勢を引かせました。上人の智慧と

福德を聞いた有力な公家や大名からの寺領の寄進が相次ぎ、この乱を契機にして高山寺は栄えることになりました。一方で後鳥羽上皇は隠岐の島に配流になっています。

市営バスは岡山街道を更に北に走り続けています。左窓にはバスの進行とは反対に清らかな溪水を湛えた清滝川が街道に沿って流れています。京都を取巻く峰々から、流れ出ている河川の名は変わっても、全て最後には淀川となり大阪湾に注ぎ込みます。清滝川も保津川となり、大堰川、桂川から淀川に変わって流れ下ります。同じ河川でも名が変わると、何処か河の風清にも違いを感じます。

周山街道は味も素っ気もなく国道 162 号線と呼ばれています。高山寺への入山口は、国道 162 号に沿って表参道と裏参道との二つがあります。いずれも交通量の多い幹道に面しています。旅人は変な拘りを持っています。寺院を拝観する際には、楽な裏参道があっても、表参道から入山する事にしています。表参道が本堂への正道であり、寺院全体の伽藍配置を知ることができます。

右手にある石組壁の上に「高山寺表参道」の大きな看板が見えています。表参道の入山口です。看板の下から石段が続き、上り切った所に「栴尾山高山寺」と彫られた石碑が立っています。寺号は富岡鉄斎の筆です、平坦に続く道を左に折れると、かつて大門が建っていた処に二基の石塔があります。道の先には、17 枚の正方形の敷石が斜状に敷かれています。繊細な意匠感覚です。参道を覆うように繁った夏の木洩れ陽で照らされた大きな千代紙の上を歩くような気分です。永六輔氏が作曲「女ひとり」の“影を落とした石畳”です。

これから先は長い長い石段が、金堂まで伸びています。高山寺は清滝川から楞加山に至る斜面に造営されている寺院です。石段の両側は天を突くような杉木立です。息を整えながら上って行きました。金堂は高山寺の一番奥まった所に収まっています。石段の上段に立つと、正面にある風雪に耐えた古拙な堂宇が金堂です。振り返って見ると、急勾配の石段は、緑のトンネルの中にありました。「金堂」はかつての本堂跡に、江戸時代寛永年間に再興されました。桁行 3 間・梁行 3 間の一重入母屋造です。修行に耐えた古老の雰囲気があります。御室仁和寺真光院の古御堂を移築した建物で、ご本尊は釈迦如来像です。高山寺が隆盛を極めた鎌倉時代には、平坦なこの地に荘厳な伽藍建築が肩を並べていたということです。想像はできません。

かつて本堂は五間四面で檜皮葺、ご本尊には運慶作の盧遮那仏が納められていたようです。当時は本堂を中心にして、左右には阿弥陀堂、更には羅漢堂、経蔵、鐘楼が並んでいたと寺歴に遺されています。全ての伽藍は「承久の乱」の戦火から免れましたが、室町期の兵火で廃塵に帰しています。

「開山堂」は右手の石段を下りた処にあります。明恵上人が晩年を過ごし、入寂した禅堂院の跡地に建てられています。内部には明恵上人の坐像が安置され、御影堂信仰の対象になっています。江戸時代に再建された堂宇です。かつての禅堂院は、室町時代に兵火を受けて焼失しています。

更に開山堂から石段を下ると「石水院」に至ります。この下り道の両側の石垣は、かつての遺構の一部として遺されています。高山寺で最も昔を偲ばれる所は、この遺構から石水院の辺りです。石水院は明恵上人時代の唯一の

遺構で、国宝に指定されている建物です。

石水院は、賀茂別院に在った後鳥羽上皇の学問所が下賜されて、移築された建物です。外見は住宅風ですが、本来は経蔵とし用いられてきました鎌倉時代の建造物で、入母屋造の柿葺の屋根を載せています。高山寺で、最も印象のある建物です。

かつて石水院は金堂の東に在って、東経蔵の役割を果たしていました。洪水で破損した後、現在の地に移築されて、春日・日光・善妙、住吉の四神を勧請した拝殿に用いられていましたが、石水院の名は遺されました。

石水院西面の廂の間は、かつて拝殿があった所です。廂の間正面には、今日も神殿当時の板扉が残っています。石水院は名を変えて、役割を変えて、場所を変えて、風雪に耐えてきた寺院です。恰も明恵上人の意志で耐え抜いた建物のです。

明恵上人が強い意志の持主であった数々〃囀の逸話が残されています。鎌倉幕府執権 北条泰時が「承久の乱」で、後鳥羽上皇に加担した明恵上人を強引に連行しようとした軍勢を説諭した逸話は既にも書いた通りです。又、明恵上人は華嚴宗の人でした。上人は法然が唱えた「専修念仏」の思想を激しく批判もしています。

(つづく)

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 2018年6月21日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講「300年ぶりの興福寺中金堂」

興福寺境内整備委員会座長 鈴木嘉吉

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

●七月予定：19日(木)

「興福寺 明治から平成」 興福寺 執事 辻 明俊

第95回 新三木会講演会のご案内

1、日時・会場 2018年6月21日(木) 13:00-15:00 如水会館

2 『中国の科学技術振興について』

沖村憲樹氏 技術振興機構顧問(元理事長)

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

TEL: 047-464-4063

フルネーム：一般・天地シニアネットワーク

会費：2000円 婦人 1000円 学生無料
茶話会：15:15-14:20 千円（自由参加）

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

7月19日（木）第96回 松尾文男氏

ジャーナリスト・元共同通信常務取締役

『アメリカと中国の長い歴史』

事務局

<投稿歓迎> <図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版（無料）を編集してプリント版を月に1回発行郵送しています。お申込みくださればお送りします。

一応、実費として1月350円（4200円/年）をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先> 振込先：三井住友銀行「神田支店」（普通）7871532
（口座名）テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・473号

発行：2018年6月15日

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651

携帯電話（津田）：090-2534-1316